

## 幻影：文苑

著者	天花
雑誌名	龍南會雜誌
巻	9 7
ページ	4 8 - 5 2
発行年	1903-02-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5455">http://hdl.handle.net/2298/5455</a>

## 文苑

## 幻影

天 花

美しく、よしある人の、世をはかなみ、身を沈めて逝きたるが、きよき水底に今も眠りて、年毎の葉月の望の夜には、静かなるうまゐより醒めて、風もなく、ほの白き靄たち罩むる湖面を、裳裾ながう、たけなる黒髪を波うたせつゝ、青白き月明りを、曉かけて、夜もすがら飛揚すどぞ。いつの世よりかいひるめけん。名もくろ髪湖とて、もの凄きばかり。ふかき秘密をつゝめる水の、色さへたゞならず。

未だろを見たるものなし。たゞ老ひたる村人の、つれづれなるまゝの、まどわにのみ。

その湖のほとり。ものふりたる木立の、いやが上に生ひ茂りたれば、濃やかに、黒ずめる青葉の、互に相交りて、一きはくらき闇をつくれるなかに、山寺たてり。

まどかなる月は、山寺の塔にかゝりぬ。げに、美しき人の、湖上をさまよふべき夜ぞ。

あはれ、この月明を、手馴れの笛とりて、興じ明かす人もあらず。寂然、死よりも静かなる夜なり。みどりの空も、したゝるばかり、はや、夜露にうるはる木立の、梢々に月のひかりを流せるなかを、悄然、首うなだれし人ひとり。白衣のすがたは、葉としにちらちら。

蝙蝠二三、不意に、あたりの寂莫をやぶりて、打仰ぐばかりなる寺檐より、ばらばらと飛び立ちた

るが、何處ともなく見ゆなりて、又もこの静けさにかへれば、涼しき風、かすかにうよるよ。やがて、露のこぼるゝ音、葉と葉のさゝやぐ聲。

白衣の人は、しづかに歩をかはしつ。

やれたる御堂の扉に、身をよせたるまゝ、白衣の人は、頭をあげて月を仰ぎぬ。年わかき僧の、いかなる思にや惱む。月をあびたる顔の、いとやせて蒼く、境静かなれば、折々もらす幽かなる嘆聲も、聞かるゝばかり。あはれ、やつれたる姿かな。

若き人は、やがて御堂をはなれて、木立に隠れぬ。また木立をいでぬ。白き影は細くくなりて、再び、湖にのぞめる鐘樓にあらはれぬ。

夜目には見えず。巧なる彫刻をはどこせる、半面に月の光をうけたる巨鐘をうしろに、手を拱ねきて、欄にもたれぬ。黒髪の湖は目の下なり。

みな底ふかく眠れる、美しき人の夢をさまざんとを恐れて、村人は今も水を乱すことなければ、汀には蘆いと茂り合ひ、どころどころ、湖面には浮萍しづかなり。

汀といはず、木立といはず、湖のほとりの、あらゆるものは、冷かなる色を帯びぬ。湖には水漫々と、月影に色あり。漣たえず起り、蘆の葉ゆすれゆすれて、淋しき音を立つれば、汀をめぐるて描かるゝ金線幾條。

湖畔一帯、平和なる夢に入りて、満目たゞ太寂。

げに、静かなる夏の夜なるかな。鐘樓に近く、まばらに生へたる小松の、葉越に見ゆる小高き丘には、薄さみの一つ梗、たかを簪たり。そのおち方に林あり、森あり。月かげもさしこず。木立あ

る地のすべては、くらき闇をつくれるに、たゞ湖面のみ、うるはしう照らされたり。  
あゝ、月は清浄なり。水は悠遠なり。

## 五十

かゝる天地の間に、月を仰いでゐるは、白衣の人たゞひとり。  
たとへしもなき感興に撲たれたるまゝ、その心の翼をかりて、若き人は、己に過去の、ある幻のやうなる、何物をか捉へたるなり。何物をか捉へし。見上げたる眼には、月の光にかゝやくものあり。

とするまに、心からにや、鬱蒼たる木立の、枝をくみ交して、一きは黒き影を落せる湖の一隅より飄揚として、あらはれ出でたる美しき姿。

身にゝる影もなく、姿は湖心に漂ひいでぬ。ひらひらと風に翻るうすき衣の、月の光に一しは際だちて、鮮やかに白く、足のあたりは、靄にうすれぬ。

世をはかなみて逝せにし、美しき人ならずと、誰か見るべき。されど……わかき僧は……たゞ見つめぬ。

尊くも、またやさしき姿かな。近づくまゝに、雪のごとき顔の、眉うつくしく、ろ上風になびく袂よりは、露したるらんばかりなり。たけなるぬれ髪は、ゆらくと波立ちて、兩の肩にこぼれぬ。僧はたゞ見つめぬ。みつめたる顔には、驚きの色あらはれぬ。

あゝ、人は知らず、涼しき眼、豊かなる頬。げに、うつし世のまゝなるすがた。

わかき僧は、つと立上りて、撞木をとりぬ。

ろの袂のはらりと翻り、あらはれたる眞白き腕の、力をこめて動くところ、古鐘は、れどそかに、

るの巨口を開きつ。

譬へば、はてしなき海原を、大波のまきゆくがごと、鐘のひびきは、空間より空間にひろがりぬ。寂しく黒ずめる水は、よろこびてるを傳へ、静けき闇をつくりたる森は、よろこびてるを迎へぬ。幽寂なる湖をめぐりて、長き沈黙にあけるものは、鐘のひびきに、躍りつ、狂ひつ、反響しつ。

若僧は、又もや撞木をとりあげて、破れよとばかり。

巨鐘は、光にいで闇にかくれ、前うしろに揺れぬ。静かなる夜の大氣は、大波紋を織り、沈痛なるひびきは、とほく遠くひろがりぬ。

又一杵、次いで又一杵。

音波と音波と打重なるところ、振盪せんばかりなる夜氣のうちに、美しき姿は、依然として、なほ冷やかに立てり。

許せ！と一聲。最後の一杵を、つき終るや否や、白衣の姿は、鐘樓の上よりひらり。

刹那、浮萍さと破れて、月影ゆらゆら。金波は碎けて、余沫四方にとび散りぬ。

その飛びちりたる金波の、再びもどにかへり、穏やかなる波のうねり、遠くく消ゆきたる時、浮萍は、やがて静かに閉ぢ合ひぬ。

浮萍しづかに閉ぢて、巨鐘うなりを収めたる時、わかれ僧は、静かに、とはの眠りにつきぬ。

あゝ、若き僧は、果して何物を見たる。

村人は、二週日前、くろ髪湖に身を沈めたる、あはれなる乙女を救ひぬ。湖をさること、程とは

からぬ賤が家には、曉かけてともし火もゑぬ。その残んの灯火の、まさな絶えなんとする時、悲しみの聲は戸外にもれぬ。

その夕、夢のごとく逝にし乙女は葬られぬ。

讀經をさぐる時、聲もうち震ひ、重げに、柩の上に頭うなだれしは、かの僧なりき。最後の告別を與へし時、經帷子ざわ／＼とすれ合ひて、あはれ、かのやさしき乙女は、かすかにふるへざりしか。

花の如く清き胸に、甘き戀の香をしりゐめて、ほゝゑみつ、樂しみつ、徒に、來ん日を待ちたりし人。青春の血わきかへる身の、人の情を壓し、冷酷なる法をどく、大聖釋迦の教を繙きては、くらし思ひに、幾夜か苦しみ、惱み、悶へし人。人と人とかくしたる水は、どこしへにまた、その秘密をもつつみつ。

人は知らず。黒髪の湖には、たゞ、死の神すめりと。

(西詩經案二月十一日稿)

